2019年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00〜16：00　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないようにしてください。

7．一度記入したマークを修正する場合，しっかりと消してください。消し残しがあると，マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

『ガリヴァー旅行記』において最初に登場する肉体の映像が皮膚であることは、この書物の全体にわたる表層志向を考え合わせるならば、きわめて重要な意味をもってくる。リリパットに漂着したガリヴァーは、まず触覚によって矮人（わいじん）たちの存在を認知する。

「わたしは左足の上でなにか生物が蠢（うごめ）いているのを感じた。それはそろりそろりと胸の上を通って顎（あご）のすぐ手前までやって来るのだった。」

ガリヴァーにとって皮膚とは、矮人たちとの意思疎通のさいの基本的媒体である。彼が続いて語るところによれば、彼らの射る弓矢が「針でも刺すように」チクチクと感じられた。「顔といわず手といわず一面に射かけられた矢の痛みは、まるで火ぶくれのようになって残っているし、現にまだ沢山の矢がそこに刺さったままであった。」ガリヴァーがリリパットの住人たちに服従するのは、率直にいって皮膚を守るために他ならない。

人間の身体において、皮膚は周縁的部分としてつねにイヤしめられてきた。(1)表層（皮膚）は、深奥に隠されている物の表面的な現れではあっても、それ自体としては取りあげるべき対象ではない、と考えられてきたのである。人類学者アシュレイ・モンタギューは『タッチング』（一九七八年）のなかで、皮膚に対する人間の無関心の証拠として、身体のどの部分についてもそれを祝福する詩が存在しているのに、皮膚をめぐる洗練された詩的表現の数が驚くほど稀であることに、(2)ラクタンの意を示している。

『旅行記』では、皮膚の映像が実に豊かに展開される。第一の航海で矮人たちを前にした巨大なガリヴァーにとって、それは触覚的媒体であった。しかし逆に第二の航海で巨人たちの卓の上に置かれた、われらが侏儒（しゅじゅ）の漂流者には、皮膚はまず視覚的対象としてグロテスクな映像を醸(3)しだすことになる。ブロブディンナグの農家でガリヴァーが観察することになった、乳母の巨大な乳房の描写を検討してみることにしよう。

実を言うなら、その怪物じみた乳房ほど気持ちの悪いものは見たことはなかったので、好奇心に満ちた読者に、その大きさ、形、色のぐあいを伝えようとしても、何に譬えてよいのやらわからないのである。まず六フィートは盛り上がっていたし、周囲も十六フィートくらいあった。乳首はわたしの頭の半分くらいの大きさで、乳房全体が、斑点やにきび、そばかすでいたるところ色が違っており、いやはやこれ以上嘔気を催させるものもなかった。彼女は赤ん坊に乳を与えるのに都合がいいように屈みこむし、こちらは食卓の上だ。その姿を眼のあたりにじっくりと見ることになった。ふとここで思い出したのが、イギリス女性の綺麗な肌で、なるほどそれは人眼には美しく見えるだろうが、結局、見る側と同じ大きさであるから美しいだけの話で、拡大鏡を通してみるならば、その汚点に気づくはずだろう。どれほど滑らかで白い肌にしたところで、拡大鏡の実験の結果、凸凹で不気味な色の鳥肌とわかるだろう。

万物の尺度を十二倍に拡大する（したがって面積は一四四倍、体積は一七二八倍）という巨人国の原理は、日常生活でわれわれが女性の乳房に与えてきた意味の含み――例えば慈愛、美といった観念をみごとに解体してしまう。ここにはエロチシズムすらすでに存在していない。エロチシズムとは本来的に、同じ水準におかれた人間どうしが張りめぐらす、意味の体系のなかでこそ成立する、屈折現象のためである。事物の拡大は、対象と観察者とのあいだに通常定められているはずの距離を攪乱する。美学的立場に立ったならば、ものを過度に接近させることは危険である。今ガリヴァーの眼前に存在している皮膚は、もはや統合された身体的器官ではない。全体と部分との古典的均衡を見失い、表層そのものに [(4)] された肉体、意味内容を解体されてしまった肉体である。彼は命名や既知の事物との関係づけが不可能なまま（「何に譬えてよいのやらわからない」）斑点やにきび、そばかすといった多彩な表情に超クローズアップで眼球を接近することを強いられている。

アリストテレスは『詩学』において書いている。

「極端に小さな動物は美しくありえないであろう。それはほとんど気づかぬくらい短い瞬間に見られてしまうために、不鮮明なまま何も識別できないからである。他方また、極端に大きな動物もやはり美しくありえないであろう。それはいちどに見られ

ることができずに、観察者であるわれわれにとっては、それのもつ全一性が視野から失われてしまうからである」

美は、ギリシャ以来、秩序の相関物と考えられてきた。古典美学によれば、それは個々の部分に宿るものではなく、全体の均衡のなかにこそ宿っていた。調和ある構成を忘れて細部に異常に執着することは、美からの背徳的逸脱と判断されてきた。

ブロブディンナグの乳房の描写は、まさにこうしたアリストテレス美学に対するグロテスクな転覆行為であり、ここでは祝祭の感覚に満ちた、規範を欠いた肉体が現前している。問題とされているのはもはや美ではなく、(5)である。ガリヴァーが巨大な乳房を前に感じた嘔吐感は、彼がイギリスで育んできた美学的秩序の崩壊に起因しているばかりではない。〈乳房〉〈乳首〉といったふうに、自然言語の分節作用に甘んじていた皮膚が、不意に言葉による囲い込みを破り、不定形でグロテスクな物質性を雄弁に主張しはじめたために、生じた事態でもある。皮膚はガリヴァーの視線を前にして溢れ出てしまう。そこではすでにあらゆる意味内容が消滅している。それはまさに(6)であって、『旅行記』の文体の表面性、ノンセンスな言語遊戯とあいまって、深奥の人格を欠落させた話者ガリヴァーの仮面性と深く結びついている。

巨人女の乳房を観察したのちのガリヴァーの態度についても、触れておくことにしたい。彼は驚嘆し、恐怖に近い幻滅を体験したあとで、ただちにリリパット人たちの肌の美しさを思い出す。矮人の学者がかつてガリヴァーの肉体について述べた言葉を、考えてみよう。

「彼の発見によれば、わたしの皮膚は大きな孔だらけで、髯の根は野猪の剛毛と比較しても十倍も堅い。それに顔色ときたら、いくつもの色模様になっていて、胸がむかつくばかり」であったという。こうして皮膚に対する違和感は、巨人からイギリス人を経て、語り手自身へと行きつくことになる。

次に、ガリヴァーが乗っている馬車を、大勢の巨人の物乞いが覗き込む場面における、グロテスク・リアリズムを取りあげてみよう。

乳癌に罹っている女がいた。癌は異常な大きさに膨れあがっており、一面の孔だらけだった。二、三の孔は、わたしが潜り

こんでも、たやすく全身が埋まってしまうほどの大きさだった。首に、羊毛を詰めた俵を五個よせた以上の大きさの瘤をもった男がいた。高さ二十フィートはあろうかと思うほどの、木の義足をした男もいた。しかし、とりわけ気味悪く感じたのは、連中の衣服をがさごそと這いまわる虱だった。

皮膚に空いた巨大な穴のなかに全身が埋まりこんでしまった矮人とは、まさにカーニバル的存在ではないだろうか。ガリヴァーの空想のなかで肉体は他の肉体と接合され、(7)象眼されて、ボスやブリューゲルの絵画を連想させるグロテスクな光景を織りなしている。乳首、乳癌、瘤といった隆起陥没部は、鼻とともに、肉体の畸型的緊張を明示しており、未完結にして不均衡という祝祭的要素を体現している。

とはいうものの、われらが小心なる語り手は(8)カーニバル的肉体と陽気な交感を保つことができないでいる。自分からはいかなる皮膚にも触れることもなく、激しい嫌悪感のもとに、観察者の位置に留まり続けているのだ。ブロブディンナグ全体はグロテスクな祝祭的雰囲気に満ちているのだが、ガリヴァーの主観は、こうした感覚に対して閉鎖されたままであり、もっぱら否定的な印象しか抱いていない。彼は祝祭を憎悪しているといえなくもない。そして作者であるスウィフトは、そうしたガリヴァーの(9)キョウショウな感受性に冷ややかに嘲笑を加えている。

スウィフトにおける皮膚の主題への固執については、『旅行記』のみならず、初期の『桶物語』（一七〇四年）や多くのスカトロジカルな謎歌までを視野におさめたうえで、新たに論考がなされるべきであろう。すでに『桶物語』の正体不明の語り手は次のように語っている。

「事物の表層を語ることの賢明は、事物の深奥へ貫入し、結局内側には何らの美点もないという類いの報告や発見を土産にして、厳粛な足取りで帰ってくる自称哲学者とやらに比べて、はるかに好ましいことである」

この例として、彼は奇怪な皮膚礼賛を開始するにいたる。「わたしは先週、皮を剥いだ女を見た。諸君はまさかと思われるかもしれぬが、彼女の姿がどれほど醜く変わったことか。昨日、わたしは眼の前で、ある美青年の屍体を裸にしてみせた。服の下

にあまりに多くの、思いもよらぬ欠点を発見し、一同は驚きに耐えなかったものである」

哲学者の説く事物の背後の本質や、神秘学者の観想する深奥の真理は、こうして皮膚と服飾の内側の醜穢(しゅうわい)極まりない形状と重ね焼きされることで貶(おとし)められる。(10)屠殺者(とさつ)としての形而上学者！　『桶物語』の深層嫌悪は、語り手の精神錯乱や虚言脱線癖と結びつき、ついには「大宇宙は、万物を包み込む巨大な一組の衣装である」といった天文学のパロディの域にまで到達している。われわれは、反プラトン主義的な戯作(げさく)の系譜を、スウィフトを起点としてイギリス文学のうちに辿(たど)ることができる。ローレンス・スターン、トマス・カーライル（『衣装哲学』）を経て、一九世紀のルイス・キャロル、オスカー・ワイルドへ通じる流れである。皮膚と表層への(11)コウディが今日の美学をめぐる主調音であることを理解するためには、ジル・ドゥルーズの批評（『感覚の論理学』）、ルネ・マグリットの絵画、藤枝静男の私小説（『田紳有楽』）を挙げておけば充分であろう。

（四方田犬彦『空想旅行の修辞学』による）

注　『ガリヴァー旅行記』……アイルランドの作家ジョナサン・スウィフト（一六六七～一七四五）が一七二六年に出版した諷刺小説。　リリパット……『ガリヴァー旅行記』に登場する矮人の国。　ブロブディンナグ……『ガリヴァー旅行記』に登場する巨人の国。

〔問一〕　傍線(1)(2)(9)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　傍線(3)(7)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 空欄(4)(5)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(4) A 転換　B 還元　C 展開　D 昇華　E 逆転

(5) A 過剰　B 差異　C 均衡　D 欠如　E 肥大

〔問四〕 空欄(6)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 過度な接近描写を甘受する視覚対象
B 深層に隠れていた物の表層への発現
C 全一的な視野に置かれた肉体の映像
D 俗化された詩的表現による身体表象
E 表層そのものとして肯定された表層

〔問五〕 傍線(8)「カーニバル的肉体」とあるが、その説明として正しいものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

A 未完結で不均衡な美的観念を深奥の真理によって転覆させる肉体
B 全体と部分の古典的均衡の内にあって畸形的緊張を明示する肉体
C 観察者と視覚的対象のあいだにある慣例的な距離をかき乱す肉体
D 自然言語の分節作用によって囲い込まれた反プラトン主義的肉体
E 醜穢極まりない内部の形状によって美学的秩序を崩壊させる肉体

〔問六〕 傍線(10)「屠殺者としての形而上学者！」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 事物の本質や真理を探ろうとする者は、事物の表層を剥ぎ取り内側を露呈させてしまう。

B 皮膚や衣装を引き剥がす者は、それらの内側の醜さを事物の真理に重ね合わせてしまう。

C 事物の調和的な全体を忘れてその細部に執着する者は、美から背徳的に逸脱してしまう。

D 深層を嫌悪して表層を礼賛する者は、事物の背後に貫入して事物の本質を貶めてしまう。

E 事物の真理を観想しようとする者は、事物の深層にある統合的な構成を解体してしまう。

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア リリパットの学者から見れば、ガリヴァーの肉体は秩序を破壊して嫌悪感を催させるものとなるが、ガリヴァーの感受性はギリシャ以来の古典的な美的秩序に基づいている。

イ ボスやブリューゲルの絵画を連想させる『旅行記』のグロテスクな光景は、観念を物質に置き換えて表現することで、アリストテレス美学における古典的均衡を転倒させる。

ウ リリパットの矮人もブロブディンナグの巨人も、ガリヴァーにとっては、同じ水準にある人間どうしにのみ成立する意味の体系を、その極端さによって破壊する存在である。

エ ガリヴァーは、内面が欠落したその仮面的な人物造形において表層的存在であるがゆえに、外面的には規範を欠いた肉体を『旅行記』の中に現前させる語り手となっている。

オ 『桶物語』におけるスウィフトは、深層嫌悪に語り手の精神錯乱や虚言脱線癖を結びつけて表現することにより、深層嫌悪そのものをパロディ化する領域にまで達している。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

かつて戦後世代を中心とする若者たちにとって、「孤独」とは常に「連帯」の対義語であり、共にかかわるべき状況がはっきりとイメージされた上での疎外感だった。だが現代のわれわれは、もはやかつての六〇年安保のような、国を二分する議論が存在しにくい状況を生きている。単に政治状況が変わったから、という単純な問題ではなく、アイデンティティとしての「民族」や「国家」自体が概念として疑われつつあるという背景があるし、また、メディアの変容が現実との関係をより間接的なものにしつつある、という事情もあるだろう。湾岸戦争（一九九〇～九一）の時、戦争があたかもテレビゲームの一場面であるかのように映像化されていく錯覚がしばしば指摘された。地球上のどこかで殺し合いが行われているのだけれども、生きている現実とは別世界の、かけ離れた出来事のようにしか感じられない。また、ネット上のコミュニケーションも、自分の身を隠しながら相手に情報を小出しにし、厭（いや）になればいつでも一方的に手を切ることができる、ある意味ではきわめて〝安全〟な、間接的な接触の仕方ではある。

互いに過度に干渉したくない。周りの人間と違う自分を、無用な接触を避けつつ、絶えずどこかで確保しておきたい。けれどもそこだけに閉じこもることも不安なので、他者への窓口は開けておきたい。疎隔の度合いを絶えずチェックし、知悉（ちしつ）しておかなければいられない。へだたっていると同時にどこかでつながっていたい。そういったバランス感覚で勝負していく、とでもいうのであろうか。これはある意味では非常に繊細な神経を必要とし、気を使う営為でもある。結果的に気が付いた時には一人になっている、というのが(1)きわめて今日的な「孤独」の状況なのではなかろうか。

こうした中で、自分ひとりだけが周囲と違っているということをこっそりとささやきかけてくれる太宰治の文学が、今、新しい意味を持ち始めている。それは漠然とした他者とのへだたりをどのように受け止めるべきか、という悩みをひそかに癒やしてくれる存在でもあるらしい。

代表作である『人間失格』（一九四八）の一節を引いてみよう。

自分は、皆にあいそがいいかはりに、「友情」といふものを、いちども実感した事が無く、堀木のやうな遊び友達は別として、いつさいの付き合ひは、ただ苦痛を覚えるばかりで、その苦痛をもみほぐさうとして懸命にお道化を演じて、かへつて、へとへとになり、わづかに知り合つてゐるひとの顔を、それに似た顔をさへ、往来などで見掛けても、ぎよつとして、一瞬、めまひするほどの不快な戦慄に襲はれる有様で、人に好かれる事は知つてゐても、人を愛する能力に於いては欠けてゐるところがあるやうでした。

（「第三の手記」一）

こうした疎隔感を自己愛的な「オタク」や「引きこもり」の一言で片づけてしまうのは容易だろう。しかし、一方で傷つく前にすでにそれを予知して〝傷ついて〟しまい、他者と自己との距離に極度にナーバスになってしまう感性ゆえに見えてくる世界というものがあるのではないか。他者と適度な距離をとろうとしてもうまくいかず、結局一人芝居を演じて疲れてしまうという「太宰治シンドローム」は、実は着実に広がりつつあるのである。

太宰治の小説の語り手がとっているのは、努めて自分はダメな人間だということを強調する手段である。しかしそこには逆説的な真理があって、否定する内容ではなく、否定という言語行為を通して初めて浮かび上がってくる自分がある、という自負がぬりこめられているのではないだろうか。(2)

以前、仕事の必要で十八、九歳の若者たちの面接を担当していたことがある。わずか五分のうちにさまざまな質問をぶつけるのだが、その中の一つに「自分の長所と短所をそれぞれ説明してみて下さい。」というのがあった。そして不思議なことに、この質問をすると、皆、実に熱心に自分の短所について語り出すのである。自分がいかにダメな人間であるか、いかなる欠陥を持っているのか――途中でさえぎり、これは試験なのだからもう少し長所について触れた方がいいのでは？　という意地悪な質問をすると、ハッと気がついてしばらく考え、口ごもった末にまた再び短所について語り出す。自分を語るときに、肯定形よりも、否定形の方がはるかに語りやすいようなのである。

この話を以前ある東欧の研究者に紹介したところ、やはり自分の国でも同じような傾向がある、と語っていた。おそらく日本

人の謙譲の美徳、ということだけでは決して片づかない問題があるのだろう。そもそも、自分で語る自分の長所というのはうさん臭いものだ。一般に、ある年齢を過ぎると公の場で自分の長所や自慢話が平気でできるようになる傾向があるが、はた迷惑なことが多いものである。実際の年齢とは別に、二十歳前後でもこのあたりの感覚がすでに麻痺してしまっているケースもあるようだが、一般に、もっとも多感なこの年代にあっては、どうしても肯定形で自分を語ることができないのである。客観的に見て何もそこまでいう必要はないのではないかと思うほど、ムキになって自分を否定する。そしておもしろいことに、否定している内容はさっぱりあたっているようには思えぬのに、ムキになって否定するまさにその身振りやしぐさに、ほかの誰をもってしても代え難い〝その人らしさ〟が顕現してくるのである。

おそらく「ほかの誰とも違う自分」が予め肯定的に説明できるものとしてある、という発想自体が問題なのだろう。戦後のいわゆる「個性」偏重教育の落とし穴がここにある。「自分」というものは、ほかの誰よりもまず自分自身にとって把握しがたいものなのであり、仮にあるとしても、それを語ろうとする方法や身振りを通してしか表現し得ぬものなのではあるまいか。

太宰治のある種確信犯的な自己否定の背後には、まさにその否定の仕方そのものの中に自分のすべてが出てくるのだという、強い信念が内在しているのである。

ことばというのは考えを伝え合うコミュニケーションの手段ではあるけれども、必ずしも理解を完全にするための手立てではないのではないか。相手があり、自分があって、関係を結ぶためにはどうしても [(3)] 、そうした発想が時には必要なのではないか。繰り返して言えば、太宰の小説の語り手や主人公がとっているのは、努めて自分はダメな人間だ、ということを強調する手段である。それによってダメな自分とそうでない周囲とのへだたりが生まれ、それによって初めてそのあいだに漂う不安や気まずさを対象化していくこともまた可能になる。たとえば初期の代表作、『道化の華』（一九三五）の一節を引いてみることにしよう。

どだいこの小説は面白くない。姿勢だけのものである。こんな小説なら、いちまい書くも百枚書くもおなじだ。しかしそ

のことは始めから覚悟してゐた。書いてゐるうちに、なにかひとつぐらゐ、むきなものが出るだらうと楽観してゐた。僕はきざだ。きざではあるが、なにかひとつぐらゐ、いいとこがあるまいか。僕はおのれの調子づいた臭い文章に絶望しつつ、なにかひとつぐらゐなにかひとつぐらゐとそればかりを、あちこちひつくりかへして捜した。そのうちに、僕はじりじり硬直をはじめた。くたばつたのだ。ああ、小説は無心に書くに限る！

書き手が自分の書いている内容をことさらに否定してみせているのだが、実は必死に自嘲のポーズをとるその姿に、読み手は茫漠と広がる他者との距離を埋めようとする自意識の運動を読みとり、素朴な共鳴を感ずるのである。太宰が次々に繰り出してみせる嘘、演技、ポーズは、それが大袈裟な身振りであればあるほど、他者とへだたろうとし、なおかつその距離の取り方がわからずに一人で疲れてしまう〝孤独〟な精神の共感を呼び、そしてまさにその身振りの過剰さこそが、断片化されたコミュニケーションの間隙を満たしてくれるのだ。

現代は、情報過多の時代であると言われるが、個々の情報が客観を装えば装うほど、情報を送り出す送り手の身振り、背後に見え隠れする手つきのようなものへの希求はかえって強まっているのではないだろうか。ことばの気まずさに開き直り、それを過剰に演じてみせる身振り、と言ってよいのかもしれない。物語の内容よりも、その内容をどのように読み手に伝えるかという意図をさまざまな形で伝えてくれる太宰の文体は、砂漠が水を吸い込むように、現代の「孤独」な状況に受け入れられる素地を持っているのである。

（安藤宏『太宰治　弱さを演じるということ』による）

〔問一〕 傍線(1)「きわめて今日的な「孤独」の状況」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 他者との距離の改善を試みながら一人になってしまった状態
B 他者と距離をとって閉じこもり一人になってしまった状態
C 他者との距離が縮まらずに一人になってしまった状態
D 他者との距離をはかりかねて一人になってしまった状態
E 他者から過度な距離をおかれて一人になってしまった状態

〔問二〕 傍線(2)「逆説的な真理」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 重ねて自己を否定する表現を繰り出すことによって、直接には把握しがたい自己が現れる。
B 故意に自己の評価をおとしめることによって、直接には把握しがたい自己の価値が生成する。
C 努めて自己に道化の一人芝居を課すことによって、直接には把握しがたい真の自己が浮上する。
D あえて自己を肯定形で語ることを慎むことによって、直接には把握しがたい自己が顕現する。
E 懸命に自己の短所を強調することによって、直接には把握しがたい自己の長所が発現する。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当な文を左の中から選び、符号で答えなさい。

A へだたりを無くすことが第一で、ことばは単なる道具以上の力を持つ
B へだたりは障害となり、それに気づくきっかけとしてことばを用いる
C へだたりが必要であり、そのへだたりをつくるためにことばがある
D へだたりを消し去ることが肝要で、ことばはその補完的な役割を担う
E へだたりがつくられなければならず、それはことばだけでは不十分である

〔問四〕筆者によれば太宰治の作品が今日的状況に受け入れられるのはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　必死な否定を繰り返すことで他人との距離を適切に調節し、最後にようやく精神の安定をはかるという書き手の労苦に、読者は現代における孤独な人間関係を見出し共感を覚えるから。

B　過剰な自己否定の態度をとることにこだわらざるを得ない書き手の身振りが、他人との距離のとり方がわからずにもがく自意識の現れとして、読者に共感をもって受け入れられるから。

C　自分と他人との距離のとりかたに悩む書き手が、その距離を調整しようとして苦しむ様子が客観的に描写されている点に読者は共感し、そこにまぎれもない自分の姿を発見するから。

D　語る内容より伝え方で書き手の姿を浮かび上がらせる方法が、他人との距離を埋めるために試行錯誤する姿として読者に共感を呼び、断片化した人間関係を改善する希望を与えるから。

E　自己否定という確信犯的な言語行為で読者との距離を埋める書き手の姿勢が、他者から隔絶した現代の疎外感を癒やし、人間関係のへだたりを解消するものとして読者の共感を呼ぶから。

三　次の文章は、『隠れ蓑』や『とりかへばや』などの物語の改作について書かれた評論である。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

また、「『隠れ蓑』こそ、めづらしきことにとりかかりて、見どころありぬべきものの、あまりにさらでありぬべきこと多く、言葉遣ひいたく古めかしく、歌などのわろければにや、一手に言はるる『とりかへばや』には殊の外に押されて、(1)今はいと見る人少なきものにてはべり。あはれにも、をかしくも、めづらしくも、さまざま見どころありぬべきことに思ひ寄りて、むげにさせることもなきこそ口惜しけれ。『今とりかへばや』とて、(2)いといたきもの、今の世に出で来たるやうに、『今隠れ蓑』といふものをし出だす人のはべれかし。今の世には、見どころありてし出づる人も(3)ありなむかし。むげにこのごろとなりて出で来たるとて、少々見はべりしは、古きものどもよりはなかなか心ありてこそ(4)見えはべりしか」など言へば、「げに、『源氏』よりはさきの物語ども、『うつほ』をはじめてあまた見てはべるこそ、皆いと見どころ少なくはべれ。古体にし、古めかしきはことわり、言葉遣ひ、歌などは、させることなくはべるは、『万葉集』などの風情に、耳及びはべらぬなるべし。など、ただ今聞こえつる『今とりかへばや』などの、もとにまさりはべるさまよ。何事もものまねびは必ずもとには劣るわざなるを、(5)これは、いと憎からず(6)をかしくこそあめれな。言葉遣ひ、歌なども悪しくもなし。おびたたしく恐ろしきところなどもなかめり。もとには、女中納言のありさまいと憎きに、これは、何事もいとよくこそあれ。かかるさまになる、うたてけしからぬ筋にはおぼえず、まことにさるべきものの報いなどにてぞあらむ、と推し量られて、かかる身のありさまをいみじく口惜しく(7)思ひ知りたるほど、いといとほしく、尚侍もいとよし。中納言の女になりかへり、子生むほどのありさまも、尚侍の男になるほども、これはいとよくこそあれ。もとのは、もとの人々皆失せて、いづこなりしともなくて、新しう出で来たるほど、いとまことしからず。これは、かたみにもとの人になり代はりて出で来たるなど、かかること思ひ寄る末ならば、かくこそすべかりけれとこそ見ゆれ。

（『無名草子』による）

注　一手に……ひとまとめに。　女中納言……権大納言の姫君。男性として右大将にまでなるが、後に女性に戻り入内する。
尚侍……女中納言の異母兄弟。男でありながら女官の最高位に至るが、後に男性に戻り関白にまでなる。

〔問一〕　傍線(1)「今はいと見る人少なき」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　本を持っている人が少ないから。
B　『今隠れ蓑』の方が面白いから。
C　『とりかへばや』に似ているから。
D　たいして見どころがないから。
E　設定が時代に合っていないから。

〔問二〕 傍線(2)(4)(6)の解釈として、もっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2) 「いといたきもの」

A とてもすばらしいもの
B とても痛々しいもの
C とても情けないもの
D とても興味深いもの

(4) 「見えはべりしか」

A 見えましたか
B ご覧になりました
C 見えました
D 拝見しましたか

(6) 「をかしくこそあめれな」

A 趣深くあったはずですよ
B 趣深くあるようですね
C 趣深くあってはならない
D 趣深くあってほしいよ

〔問三〕 傍線(3)「ありなむかし」の文法的な説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 動詞「あり」＋助詞「なむ」＋助詞「か」＋助詞「し」
B 動詞「あり」＋助詞「なむ」＋助詞「かし」
C 動詞「あり」＋助動詞「ぬ」＋助動詞「む」＋助詞「か」＋助詞「し」
D 動詞「あり」＋助動詞「ぬ」＋助動詞「む」＋助詞「かし」

〔問四〕 傍線(5)「これ」の指すものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 『隠れ蓑』
B 『とりかへばや』
C 『今とりかへばや』
D 『源氏』
E 『うつほ』
F 『万葉集』

〔問五〕 傍線(7)「思ひ知りたる」の主語としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 女中納言　B 尚侍　C 作者　D 読者

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　改作前の『とりかへばや』は、男女が消えてまた再登場する辺りが不自然である。

イ　『今とりかへばや』は言葉遣いと歌に大げさなところがあるのが欠点である。

ウ　『今とりかへばや』は男女が入れ替わって登場する辺りの趣向が良い。

エ　『今とりかへばや』は男女が取り替えられた原因まで書かれているのが良い。

オ　改作後の作品は物まねになってしまい、もとの作品より劣ることが多い。